

# 学年別による英語語彙力の相違：

## 履修年数と得点間の関係について

ジョリー幸子

### I. 目的と仮説

学習者が語学を履修するにあたり、単元が蓄積されるにつれて、その知識や言語技能等は履修年数を重ねることにより強化、拡大されると考えられる。

しかし、我が国のように大学受験を目的に数多くの高校生が塾に通ったり、個人教授を受けたりする状況下においては、必ずしも大学入学後の学年が高くなるにつれて、英語力、特に語彙数の増加が正比例するとは限らないという考え方も存在する。現にかなり厳しい、詰め込み方式による記憶を強いられた高校生達は、大学受験を終えて入学した後は、詰め込んだ英語も徐々に忘れて行くといった傾向もある。そのような経緯と環境の中では、大学1年生時における学生の保持する単語力と、その後の2年生時から4年生時までの間、特に旧一般教養科目必修8単位を履修し終えた後の3~4年生の専門科目に没頭する時期になると、英語を直接履修する縁がなくなる学生も多いことは事実である。加えて平成初期に文部省中教審の提案した、大学に於ける英語教育の必須としての8単位を、以降各大学の自由選択としたことにより、更にこの傾向は加速されたと考えられる。

しかし、その後も一般的には21世紀に向けての国際経済、外交政策のグローバル化の促進もあり、各大学によっては英語科目、コミュニケーション関連の学部や学科を新增設するところも数多く輩出している。

小稿においては英語能力、特に数値的に判断し易い、語彙力においては、学年が上がるにつれて、語彙力も上昇するという仮説を樹立し、筆者の担当する学生の1年から4年までの英単語の語彙力テストの得点を比較することによって、学年と語彙力の関連性を考えてみることを目的とする。

### II. 方法

平成15年度、1学期に筆者が担当した1年生(科目名はEnglish Interaction, 24名)、2年生(専門演習Ⅰ、27名)、3年生(専門演習Ⅲ、25名)、4年生(プロジェクトⅠ、16名)を1組のパイロット・プロジェクトの被験者として選んだ。上記の合計92名の学生は全て、本学コミュニケーション学部、言語コミュニケーション学科に属する学生である。

従って学科の性質上、言語、特に英語に興味のある学生が履修しているという共通点が一つあげられる。二つ目の特徴は、2、3、4年生の被験者達は筆者の「非言語ゼミ（ノンバーバル・コミュニケーション学）」の学生であるため、授業で使用する主テキストや補助プリント等の教材が英語で書かれており、教師（筆者）の使用言語も英語であることが多く、又教室内での decorum も英米式であることを付け加えておきたい。

平成 15 年（2003 年）の 4 月の最初の各学年の授業でのコース・オリエンテーションの直後、100 問より構成された英語語彙問題集を当日出席者 80 人に与え、各クラスとも同じ 40 分の時間内で解答させた結果を統計にとってみた。

### Ⅲ.語彙テストの結果と分析

表 1 学年別による各学年の得点数（100 点満点中）

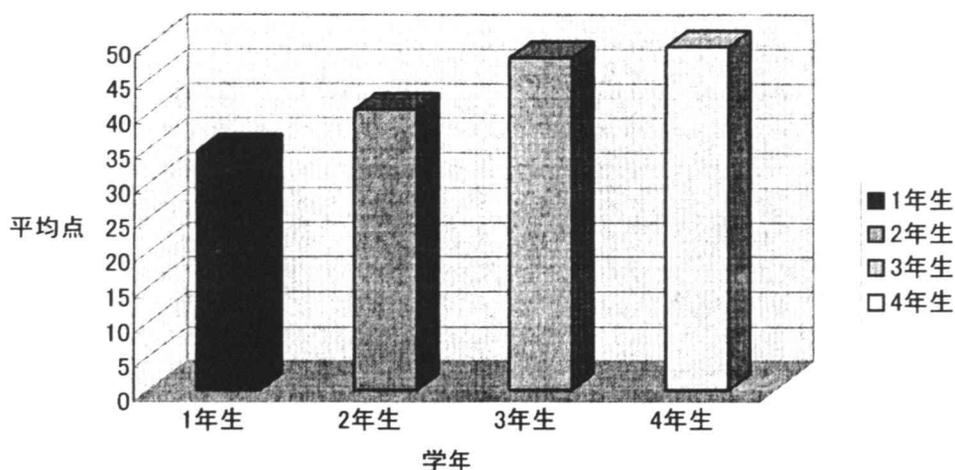
| 学 年 \ 学 生 | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 1         | 30 | 27 | 40 | 37 | 43 | 46 | 16 | 41 | 40 | 38 | 36 | 38 |
| 2         | 32 | 28 | 50 | 31 | 50 | 44 | 34 | 36 | 30 | 47 | 41 | 29 |
| 3         | 45 | 72 | 41 | 60 | 48 | 44 | 46 | 47 | 43 | 44 | 59 | 61 |
| 4         | 59 | 47 | 52 | 45 | 53 | 42 | 39 | 39 | 48 | 53 | 41 | 67 |

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 19 | 46 | 30 | 33 | 30 | 30 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |
| 36 | 47 | 37 | 55 | 44 | 44 | 44 | 56 | 24 | 31 | 42 | 40 | 39 | 39 | 57 |
| 40 | 39 | 42 | 52 | 35 | 43 | 47 | 50 | 47 |    |    |    |    |    |    |
| 48 | 60 |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |    |

表 2 英語語彙のテスト結果

| 学年 | 科目名                 | 登録学生数 | 回答者数 | 平均点  | 1つ下の学年との比較 |
|----|---------------------|-------|------|------|------------|
| 1  | English Interaction | 24 人  | 18 人 | 34.4 |            |
| 2  | 専門演習 I              | 27 人  | 27 人 | 40.3 | +5.9       |
| 3  | 専門演習 II             | 21 人  | 21 人 | 47.9 | +7.6       |
| 4  | プロジェクト              | 15 人  | 14 人 | 49.5 | +1.6       |
|    | 合計                  | 88 人  | 80 人 |      |            |

表 3 各学年の平均点の推移



#### IV. 数値的結果の分析

2年生（専門演習Ⅰ）27名の平均点、40.3ポイントは1年生の34.4ポイントと比較すると、5.9ポイントも上昇している。この理由としては幾つか考慮できるが、その一つは1年生のEnglish Interactionは言語コミ学科1年生の必須科目であるため、特に英語そのものには強い関心を持たない、中国語コース専攻や、日本語（教育）専攻の学生も混じっている。それに対して2年生の専門演習Ⅰ（ジョリーゼミ初年度生）の学生27人は全員英語コース専攻で、しかも日英両語バイリンガル話者になることを謳い文句にしている当該ゼミを選択して来た学生達であるので、英語が得意な学習者が集中しているからという要因が考えられる。

3年生（専門演習Ⅲ）の21名の平均点は47.9で2年生のそれと比較すると7.6ポイント更に上がっている。時間数から見ると本大学でのカリキュラムにおける英語授業時間合計は、2年次の4月始めでは一人当たり平均30授業コマ数時間（2700分）を蓄積していることになる。3年生の4月始めには、他のTOEFLやTOEICトレーニング等の選択科目時間を考慮に入れない単純計算では60コマ授業（5400分）になるので、丁度2倍のexposure timeになると言えよう。又、3年生は既に筆者のゼミの教材、教授法、及びdecorumに1年間慣れてきているので、テスト学で言う「向上率」も加味されるべきだろう。どちらにしても、7.6ポイントもの上昇は、筆者の期待を多に上回るものであったので、担当教師としては率直に言って嬉しい限りである。

4年生（プロジェクト）の14名の平均点は49.5点で、3年生との比は、プラス1.6ポイントである。4年生は3年の後期頃から就職活動を頻繁に行い、その分英語学習の時間も平行して減少する傾向にあると考えられる。従って4年生の4月始めの当ゼミにおける

合計蓄積授業時間は 45 コマ授業時間 (4050 分) であるが筆者の予想では、ある程度の上昇はあっても 3 年生時 4 月の 7.6 ポイントを下回るのではないかという懸念があった。事実その得点平均数の差は僅かに上昇はしたものの、3 年生が 2 年生よりも 7.6 ポイント向上しているのに比較して、1.6 ポイントという数値を示したことは、少々残念ではある。

#### IV. 終りに

以上の結果から判明することは、僅か 80 人の被験者数を擁した小規模なパイロット・リサーチではあるが、学年が上昇するにつれて英語の語彙数が 1 学年約 5 点ずつの割合で上昇していることである。

今回のリサーチでは特に考慮の範囲に入れなかったが、本学の言語コミュニケーション学科では、1 年次の前期が必修科目である English Interaction や Cyber English に加えて、選択科目である TOEFL・TOEIC トレーニング等も履修可能である。更に 2 年次になると TOEFL・TOEIC トレーニングの他にも、A m e r i c a n Literature、Communication Strategies 等のコース履修も許可され、英語学習への機会は拡大、強化される。4 年次では、TOEFL・TOEIC トレーニングにプラスして、Writing and Presentation や Communication Strategies が選択科目として、履修可能となる。従って筆者のゼミの学生もこれらの英語関連コースを同時に履修していた可能性の高いことをここに付記しておきたい。

前述の、2 年次でゼミに入ってきた時点で英語が得意であり、英語習得に熱意を持つ「バイリンガル希望者」達の集合体であるという事実が何よりの動機付けになっていることは間違いのない大きなプラス要因であるとみなされる。

将来は更に多くの被験者数で、今回のパイロット・リサーチで得たノウハウを基盤とした綿密な企画を基にした、より大きな規模の研究を実施したいと考えている。

#### 参考文献

- 林 洋和 (2002) 「理論と実践の統合をめざして」『英語の語彙指導』 溪水社
- 川上 省三 (2003) 「基礎から増やす必須英単語」『ボキャブラリー養成ミニ講座』 金星堂
- Moore, B. D. Kishida, J. (1992) 「語い力養成のための総合英語」*Enjoy American English* 成美堂
- Nadell, J. Aso, T. Tanaka, S. Toyama, K. (2000) 「検定英語のボキャブラリーチェック」*Vocabulary Basics* 成美堂
- Seal, B. 千葉元信 (編) (2002) 「American Vocabulary Builder」『英単語パワービルダー』 ピアソン・エディケーション

- Johnson, V. E. (1992) *From Reading to Word Power* Kinseido
- Keen, D. (1994) *Developing Vocabulary Skills* Heinle & Heinle Publisher
- Mckim, J. (1994) *Expanding Your Vocabulary by Word Roots* Eichosha
- Seal, B. (1990) *Vocabulary Builder 1* Longman